
機動戦士ガンダム 少女の始まり

レイス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士ガンダム 少女の始まり

【Nコード】

N6635S

【作者名】

レイス

【あらすじ】

少女は不幸と悪意によって生きていた。

死にたいと願い、しかし死ぬための勇気もなく生きていた。

そんな少女に機転が訪れた、鹵獲されたザク？とジオンの少女。

空つぽの少女は一年戦争で何を思うのか。

機動戦士ガンダムを元にしたオリジナルストーリーです。

生と嘆き（前書き）

ガンダムで百合ってあんまり見ないね。

合ったら面白そうだけどなー、戦場の絆って感じで結構探したけど百合やGLあんまり見かけないな。

ということじゃあ自分で書いてみるか。↑今ここ

外伝作品と絡ませて展開させていくつもりですがボリュームは少なめでさくさく読めるようにしていくつもりです。

基本的に行き当たりばつたりのとんでも設定でやっていきます、グダグダ注意！

更新頻度は1ヶ月くらいに一度くらいで。

生と嘆き

「早く出る！こいつじゃ一つ目からは逃げられん！」

ずしんずしんと重厚な足音と、地響きに追われる。

「全力で走ったところで逃げ切れるのですか？」

「つべこべ言つてないで早く行け！」

追い出されるように戦車から追い出された。

「本隊に拾われたら23戦車隊は壊滅したと伝える！」

何で皆は私を逃がそうとするのだろう。

命は誰にだつて一つしかないというのに…

私の所属していた23部隊員は私以外全員が2月27日付で行方不明と認定された。

これで3回命を拾ったことになる。

「もう嫌だ」

心からそう思った。

こんなにももやもやした気持ちを持ち続けるくらいなら、あのコロニーと運命を共にして何かを感じる暇もなく蒸発した方がよかった。

自殺する勇氣もないくせに、口だけは達者だ。

死にたい気持ちと死にたくない気持ちが胸の中でグルグル回っている、死にたいけど死ぬための勇氣なんて持ち合わせていない。

宙ぶらりんな感情が今の私を形成している。

何を考えているのか自分でも分からない時もある、今もそう、何に對して私は何を考えていたんだろうか。

オデッサ基地にて腐っているのが私なのだろうか。

もちろん死にたくて士官学校に入ったわけではない、軍に居るわけではなかった。

これから戦争があるかもしれないから需要があるかもって安易な考えで機械について学び始めて、それが戦車や次期主力人型戦車の研究に変わって、実際に重力下で動かした場合の影響とかを調べるためにサイド2から地球に来て・・・

気がついたら軍人として戦車隊に入れさせられて、敵も味方もたくさんの人を殺してしまつて。

それで…だから…死にたい。

人死にの責任を取るために死にたい戦いが怖いから死にたい生き残り続けてしまつたから死にたい気まずいから死にたい生きていたくないから死にたい

死にたいと言っている自分に嫌気が差したから死にたい

もちろん一時の感情、いざ死ぬとなると死にたくないと醜くわめき散らすだろつ。

負の思い、炎を燃やし続ける少女
なぜ断ち切ることが出来ない？

「だれ？」

女性の声、何かを諭すような声。

生にすがり喜びの声を上げる者

生にすぎり死に逝き断末魔を叫ぶ者
死を望み生に怒り狂う者
死を望み地獄への門を開き安堵する者

美しかった。

黒いもやのようなものから現れたそれは、美しい女性だった。

自ら自らを呪うのなら私は見届けよう
負を受け入れるのか
断ち切るのかを

女性は全てを知っているかのようにだった。

生と嘆き（後書き）

キャラクター設定

シア・レシユター兵長（18歳）

美しい黒髪が特徴の少女。

楽天的な性格で戦争なら兵器の開発でお金儲けできるかもと考え、実行に移したある意味での天才。

戦車や人型兵器など、陸戦兵器について研究しておりサイド2から地球に来ていた所、一年戦争に巻き込まれる。

その後志願して連邦軍に入隊。

帰る家も家族も一度になくしてしまったが、明るく振舞っており軍の中でも受け入れられていた。

戦車についての知識を生かし61式戦車の砲手として活躍していたが、所属していた戦車中隊が敵MS部隊の攻撃により壊滅、次に属した戦車小隊も自分以外は全滅し、その後も似たような事態が続く、周囲から忌み嫌われるようになる。

最初は明るかったシアも、自身が必ず生き残ってしまう苦悩と周囲からの目を感じ暗くなってしまった。

とんでもない一日（前書き）

さつそく超展開、無理やりこじつけ的なお話です。

自分でもよく投稿したなと自虐的になるほど、これからの展開（亡霊の扱いとか戦争残りの九ヶ月とか原作・外伝のキャラとの兼ね合いとか）とか不安です。

それらグダグダとかを楽しむ作品だと思ってください。

とんでもない一日

何だったのだろうか、あの記憶は。あの女性はなんだか意味深なことを言っていて。

何にも分からない、ベットから起き上がる。

もしかしたら、疲れていたし、夢か幻覚なのかも知れない。

「負の思い・・・」

簡単に人が死ぬ状況で三回も生き残った私は、負の感情で埋め尽くされて...いると思う。

幸いなことによく言われる目の前で死んだ人間の夢を見ることは無い、夢自体見たこともなくなっただけ。

こんなときでもお腹は空く。

もちろん食事を各部屋に持ってきてくれるなんて事は無い、人のたくさん居るところで窮屈な思いで物を食べないといけない。

人っていうのもつくづく不便だ。

やっぱり、皆が私を見て避けていく。

食事を受けとる。

「・・・不味い・・・」

そんなことを言いつつも普通に食事は喉を通る。

「シア兵長、後でドッグに来るように」

何の脈絡も無く、兵士が私の目の前に現れ、それだけ言い残し去っていった。

襟には准尉を示す襟章があった、現場にはあまり来ないはずの士官でさえ『私の所属する隊は壊滅する』と言うジンクスは気にするらしい。

無視してこれを食べ終わったら部屋に戻ろうか。

そうも考えてみたけれど、命令を無視したところで私に何かいいことがあるわけでもない。

行くしかないか。

「これを扱えるようにしろ」

一瞬何を言われたたのか分からなかった。

戦車と戦闘機しかないドックの隅っこのほうに大きな人型の機械があつて……

来ていきなりそんなことを言われて。

「敵の機械を……？」

そうだ、と私を呼び出した准尉がうなづく。

「動かして、私がこれで戦場に出ると？」

「扱えるのがお前一人しかいなかったらそうなるな」

扱えるのはたぶん私しかないだろうなあ、私が扱える可能性もあり無いが。

「私の知識を当てにしているのですから最初に言います、私がしていたのはあくまでも連邦用の機械であつて敵の機械を動かす知識なんて」

「ジオン側からの教官がいる、そいつの元で訓練すればいい」

いつの間にか機械を動かすのではなく、機械に乗って戦う事が前提になつていた。

「誰だか知りませんが、教官がいるのなら別の人を指導すればいいじゃないですか」

目立つ的に乗り込めて、死ぬのにいい機会だというのにムキになつて口論している私に腹が立つ。

すみませんと言って乗り込んだら丸く収まると言うのに。

「不毛な言い争いをしている場合じゃない、この指示に関しては命令書を見る」

なんとしてでも私に押し付けたいらしい、私にそういつつけてこの場から離れていく。

邪険に扱われていたのは知っているがここまで露骨だと私でも嫌な気持ちになる。

「終わったの？」

あの機械から人の声がした。

「シエラ・コール一等兵ですよろしく！」

私よりも幼い見た目の少女が機械から降りながら言った。

「貴女が教官？」

「この子のパイロットだったからね」

自慢げに言う。

だからジオンの教官か、敵を捕らえずに普通に兵士がいるような場所に置いておくとか。狂っているとしか思えない。

「もちろん、今は連邦兵です」

と付け足すあたり、余りにもおかしい。

呆れと言っかなんというか、おかしいのは私なんじゃないかと思っ
た。

さっき手渡された命令書を見る。

私がこの機械を扱えという旨が書いてあった。

馬鹿じゃないのかと、味方からすら忌み嫌われている私を敵の人間と一緒にさせて敵の鹵獲兵器で戦うようにと言われて。

とんでもない一日（後書き）

感想、評価等お待ちしております。

シエラはジオンから連邦に鞍替えした人ではあるが、ガンダムの世界ではもちろんそんなジオン↓連邦なんて人はいなかったはず。

ちなみにヒロインになる予定のシエラはサイド2出身ですがシア同様シローやナカサトさんとの面識はありません。

これからどうしようかな・・・本当に・・・

キャラクター設定

シエラ・コール一等兵（14歳）

サイド2出身（シアと面識はない）、両親と共にサイド3に旅行中、サイド2が破壊され帰れなくなり仕方無しに年齢を偽りジオン軍に入隊。

MSの操縦が苦手で歩くことと銃を撃つことしか出来なかったのだが、当時数が少ないMS乗りという事で前線、地球に行っていた。ザクもろとも連邦に捕まってからは、連邦の兵士となっているが。可愛いものが大好きな女の子で二つに結んだ金色の髪をなびかせている。

ひたすら明るくて前向きな性格。

暖かい涙（前書き）

始めましての方は始めまして、そうでない方は引き続きご愛読ありがとうございます。

今回も相変わらず飛ばし気味ですが（ストーリー進行速度的な意味で）うまく書けたのではないかと私は満足。

感想・評価等お待ちしております。

それでは本編の始まりです。

暖かい涙

・・・

「っ、うあああ!!」

慌てて飛び起きた。

なぜかは知らない、理由をつけるならただただ嫌な予感がしたから。が、その予感も無事に外れてくれた様子で何より。

そつと体を起して周りを確認する、うん何も異変は無い。

あのまま食堂に行く前にでも、ベットで寝込んでしまったのだろうか？どこまでが夢なのかがあやふやだ。

とりあえず顔でも洗っておこうか。

グニユウ。

「あうっう・・・」

何か、柔らかい物を踏んだ感触があった。

えーっと。

「ぐうええ・・・!」

・・・その場でジャンプしてみた、やはり柔らかい物がある、それになんか音がした。

「シエラ一等兵・・・ですね？」

「死んじゃう、痛いですう!」

起きたばかりにしては大きな声で、とても死にそうな人間の声ではない。

とりあえず、シエラの体から離れた、思いっきりお腹を踏んでいた、たぶん死にはしないだろうけど。

「夢、じゃないですよねやっぱり、何でここにいるのですか？」

「あの後ここで寝起きするようになると言われてたの、でも先にあなたが寝てて、一緒のベットになるのは悪いから」

「邪魔しちや悪いから軍服のままで床の上で寝ていたと」

コクンと首を動かす。

「貴女がもし変な病気になったとする、すると私の立場とかその他もろもろ色々危うくなると思わなかった？」

もう一度うなずいた。

「ごめんなさい」

「もういい、後でベットの申請しとくから」

身支度を済ませ、軍服を着て、食堂に向かう。

朝からどつと疲れる。

「やっと見つけましたよ、何でこんな隅っこに居るんですか？」
この子は空気を読むことを知らないのだろうか、と頭の中で突っ込んだ。

「別の人に聞いたら？オデッサで私を知らないのはほとんどいないけど？」

そこまで言つと、親切な人が来てくれた、私の武勇伝を語ってくれることだろう。

「格納庫で待つてる」

そう言つて、食べかけの食事をその場に残して移動した。

気分の悪くなる話を目の前で聞く義理など無い。

シエラの自作したマニュアルを読んでみる。

これを見る限りは案外簡単そうに見える。

私たちが造ろうと躍起になっている人型兵器もジオンの模倣みたいなものになる様子だったし、戦車の時みたいに私の経歴が役に立ちそう。

正直なところペダル踏んでレバー触ってボタン押すだけだから私が勝手に樂觀しているところもありそうだけれど。

一応これを動かす許可はあるのだがもしもの時を考えシエラが来るのを待っていた。

三十分くらいたったのだがいまだにシエラはここに来ない、私のあ話を聞いて怖くなったのかな？

誰だって死にたくは無いだろう、だからここの死なないように最善を尽くす。

出来ることを全てして、そしたら次は神にすがり、噂を遠ざけ、ジंकウスに近づかない。

私に鹵獲した貴重な機動兵器を与えてでも周囲の人間から離れたのは正解だと思う、意図せずとも士気は上がっただろうし。

出来れば、あのシエラって子も離れたほうがいいかもしれないかな・

「はあ…死にたがりの人間が何考えているんだろ」

このまま来ないのなら、この兵器を動かすのは一人でやらないといけないね。

そう考えながら立ち上がる。

カンカンカンカンと金属の床をける音がする、整備の人間はいつも慌ただしいなあ。

「シアさん!!」

「っ!??」

がつしりと後ろから抱きつかれた、気がつかなかったから咄嗟に踏ん張っていなかったら転んでいた。

「シエラさんは怖い死神なんかじゃないですよね!？」

やっぱり怖がる・・・

「生物として分類したら人間だけど、少なくともオデッサ基地の間からは死神なんてあだ名で呼ばれることもある」

「何でここの兵士の皆はそんな酷いことを言うの？」

半分泣き声だ。

「死にたくないから、私の所属していた部隊は全て無くなったのは周知の事実、だから少しでも要因になりそうなものは避けていくの、そう言うこと」

「シアさんは大丈夫なの？」

必死に適当な言い訳を考える。頭を回す。

「・・・そうゆう役割だと割り切ってる、私から離れることで皆は

安心する、死神から遠ざかれた生き残れるぞって、憎まれ役って言うのかなこうゆうの？でも必要だと私は思う、たったそれだけで生存率が上がるならそれでもいい」

慌てて考えた嘘だった、案外そんなものかも知れないと思った。

「でも・・・そんなの、シアさんに押し付けているだけです・・・」

「心配してくれてありがとう」

ゆつくりとシエラのほうを向く。

可愛らしい顔は泣きはらして赤くなっている。

そっと、シエラを抱きしめる。

私は何となく親の事を思った。

両親とは喧嘩したまま死別した。

もうすぐ戦争が始まるかもしれないから兵器の研究をしたらお金儲けが出来るかとも思って、勉強し始めて、そんな怖いことはやめなさいって両親に反対されて喧嘩して家を出て…

思ったとおり戦争が始まって、そして故郷と共に消えてしまった。

私は何故かシエラに甘えなくなった、私に優しくかった両親の影が何故かシエラに重なって見えた。

いままで死にたいと願って生きてきて、心配された程度なのに・・・

『シアさん、出会ってまだ一日もたっていないです、でも本当に心配なんです』

シエラの声が聞こえた、胸の奥に届くくらい澄んだ声だった。

同時に暖かいものを胸の奥に感じた、何か癒される感じがする。

気持ちいい、心地よい。

「心配してくれてありがとう、私はもう平気になったから」

「本当に？」

「大丈夫、だからこの機械を動かすための指導をしてくれないかな？」

シエラはゆっくりとうなずいた。

「少しだけ待ってて、忘れ物があるから」
走ってその場から逃げ出した。

もちろん忘れ物なんてない。

本当は泣き顔なんて見せなくなかったから。何故かは分からないけど、いきなり泣きなくなっただけを抑えられなくなった。

我慢ができてなくて自室に隠れて三分くらい泣いた、声を押し殺して泣いた。

久しく感じるものの無かった物を私は会って一日もたっていない少女に教えられた。

暖かい涙（後書き）

作中の時間では今は3月1日、次回は正史ではジオンがオデッサ基地を占領した日。

と言うことではじめてのMS同士の白兵戦が描かれる予定です。

活動報告のほうでも書きましたが、これからのことについて質問したいことがあります。

？戦場の移行

ファーストガンダムでは終盤アムロ達やその他外伝キャラの多くは宇宙に上がって行っています。

シア・シエラはどうするのか？

宇宙に上がって行った場合、どの部隊（艦隊をオリジナルにすると艦長とか部隊員とか、主要になる人物は少なく見積もっても5人くらい？残りは名無しにしてもそのくらい）に配属されるのか。

宇宙で単独はさすがに無理、かといってソーラレイで蒸発してしまう部隊に併せるわけには行かない。

逆に地球ならある程度融通は効きます（索敵や奇襲等を主とした部隊に入れればいいので、部隊はオリジナルも作れますし）

雪原、砂漠、水中など局地戦は難しいですが。

ただ、終盤の地球はイベントが余りにも少ない、私はジオン残党部隊狩りとサイクロプス隊を宇宙に上げるために少し戦った程度しか思いつかない。

と言うわけで質問、二人を宇宙に上げるか地球に残すか、そしてその選択をした場合に起きる主なイベントを考えて欲しいです。

？今後のMSについて

二人は今ザク？、通称旧ザクを扱っていますが今後MSを乗り換えるかどうか。

個人的には最低ジム、ザク？、最高はジム・カスタム、ドムくらい？これについても意見が欲しいです、もちろんザク？を活躍させて欲しいと言っ意見でもありがたいです、ただ下記の条件に当てはまる機体は除外です。

・ゲルググなど大戦末期に作られたのが明らかな機体（11月くらいまでの機体なら前倒しでロールアウトされていたとかの設定をつけるのでOK）。

・ガンダム系列などの高級機。

・ビグロなどのMA（ボール、オッゴ等も不可で）

・シャア専用／などの専用機

・ケンプファー、初期型ジム等の一品物、試験機（連邦の機体についてはテストパイロット等の設定を付け加えてればOKなど例外あり）。

条件はちょっと厳しいかもしれませんが活動報告でのコメント、もしくは小説の感想で意見をお願いします。

初陣と敗走（前書き）

始めましての方、始めまして。

前話から引き続きお越しになった方、ご愛読ありがとうございます。

初めての戦闘シーン、頑張って書いたけどどうなのかなあ、書き始めて（この場所に来て）半年はたつけどなれないものです・・・一話に更新は月一と書いてたけれど、今のところは調子よくかけていると思う、今は。

こんな感じで書ける事を願うばかりです。

ザクのスペックや用語に関する解説はあとがきにて注釈をつけさせていただきます（全て作者知識です、間違いのある可能性あり）。

初陣と敗走

とりあえず、指示に従ってこの機械を立ち上げる。

さっき聞いたのだが、この機械がMS（正しい呼び方はモビルスーツ）であることを教えてもらった。

初めて乗った感想、上下に揺さぶられて気持ち悪い。

「で、歩くのにはこのバーをオンにしてレバーを押す」

「とりあえず、倉庫から出てくださーい」

旋回動作も確認しつつ、ドックを出る。

「すごい動かせてますよ！動作の八割がたは習得できてますよ！」

下のほうでシエラがはしゃいでいる、それはみていて和むものなのだが、周囲の訓練生の視線は感じないのだろうか、幼い少女が連邦の軍服を着てMSを見て大喜び、辺りの兵士たちが注視している。

幼い少女…？

そういえば、どう見ても15歳には見えなくらいに小さい…

10歳前後くらいに見えなくも無い。

「それはおいといて、八割がたって、戦闘に関する動作は？」

「完全にオートなモードもあります、トリガーを引くだけの、本当にうまい人はゲームみたいに自分で狙って好きな所に当てる人もいますけど」

「なるほど…次はレーダーの見方が書いてないのだけど…」

ピイイイイイイ

まさか…

「敵襲！」

敵襲のサイレンが何の前触れもなく鳴り響く。

もちろん演習の話なんて聞いていない。

「シエラ、ハッチを開けるから早く乗ってー!!」

MSをしゃがませてシエラを乗り込ませる。

「武器は・・・何も無い？」

「バズーカも斧もみんな預けてたと思う」

「ドックに行くから、レーダーを見てて」

「うん」

レバーを倒す幅の大小で移動速度は決まるらしい、普通に歩いているだけでも相当揺られる。

乗り物酔いに対する耐性がついていたのが救いか。

「戦車隊、航空機部隊はすでに出てる、あんな大きさのMSなのにどこにいるかわかんない」

レーダーには特に何も映っていないが・・・なるほど、宇宙からの侵略者そいつってわけ・・・

HLEVが空から落ちてきている。

「これ用の武器はある！？」

「奥にあります、バズーカのほうは予備弾含めて6発しかありません、斧のほうは最初に使うときはしばらく熱さないといけません」

「分かりました」

「シエラ・・・戦える？」

「・・・もちろんです、大丈夫です」

「自由落下してくるHLEVをバズーカで落とします！」

レバーを握り、ロックオンをする。

ドオン。

「っ、これも振動が・・・！」

命中はした、しかし、私の乗っているものと似たような形のものが一機脱出していたようだ。

的が小さくなってしまっではまず当たらないと考え、別のHLEVを狙う。

「シアさん、バズーカの先込め式ですよ！」

「分かってる、もう入っているから」

二発目、これも命中。

銃口を自身に向け、肩のラックから弾を込める。

どうしても5秒はゆうにかかる、これはザクと対峙したときは使いにくい。

三発目・・・

「シアさん、上から撃ってきてますよ！」

レーダーを見ていたシエラが耳元で叫ぶ。

「いきなり言われてもっ」

「逃げますよ！」

「今レバーを触ったら！」

ドオン。

歩行時のゆれで、バズーカを撃ってしまった。

もちろん当たるはずも無い、不安定なままで撃ったので機体はかなり揺れて・・・

「倒れる！捕まって」

「えっ？」

シエラの間の抜けた声を聞いたときには、機体は修正不可能なほどに傾いていた。

ドシン。

鈍い音をたて盛大にこける。

ベルトのおかげで私の意識はある。

「痛いですう・・・」

なんとかシエラも意識が持ったようだ。

「シエラ、こんなときはどうしたらいいの？」

機体は仰向けに倒れている。

「ええっと、このレバーで膝を立てて、状況を機体に教えて、すると後は勝手にたつです」

敵はどうなってる？

レーダー上に表示されている赤い点^敵はすでに各々散っていた。狙われなかったのは単に運だろう。

とりあえず、敵を攻撃しないと。

「シエラ、白兵戦行きます」

「ちよつと待つてください!」

腰に差した斧で手近にいたMSを叩き切った。
はずだった。

ガン、と、鈍い音がして装甲に弾かれる。

「何で切れないの!？」

「まだ斧が温まってません、ただの鉄の棒を振り回しているのと同じです!」

そういえば敵の斧は先つぽのぼうがやけに赤い。

「他の敵が寄ってきてますよ、逃げましょうよ」

「ちよつと待つて!」

肩のほうを相手に向ける。

「しっかり掴まって!」

移動のレバーを思いつきり倒す。
が、いいいん。

「くっ…」

MSが倒れる。

渾身のタツクルは効果抜群だった。

「・・・ごめんなさい・・・」

今度こそちゃんと切れるほどに熱した斧を胴体に叩きつける。

・・・多分動かなくなっただと思う。

バズーカと斧を収納し、倒した敵からマシンガンとその弾をと・・・
ロケットランチャー?を頂戴する。「シアさん早く移動しましょうよ、すでにみんな逃げ出そうとしてますよ!!」

「もうちよつと待つて、使えるものは奪わないと、補給が利かないから」

「構えてます、真後ろの敵こっち狙ってます!!」

これ以上は無理。

「戦線を離れます」

返信はなかった、すでに司令室までも奪われてしまったのか・・・
「全力で逃げるから、しっかり掴まってる」

初陣と敗走（後書き）

MS

シア・シエラが搭乗しているのはザク？

敵はザク？

ザク？は頭部が丸く、肩のシールドが無い。また出力はかなり低く、ビーム兵器を搭載出来ず、運動能力も高くない。

ザク？はザク？の強化版で肩のシールド、多彩な武装が主な特徴、一年戦争時は主にザクはこちらを指し、ザク？は旧ザクと呼ばれている。

HLV

円錐形をしており、推進剤を補充すれば何度でも再使用できる。生産・運用コストが低く、大量の物資（MS・人員等）が運搬できる。

バズーカ

ザクバズーカのことシア・シエラ共に正式名称は知らない様子なのでバズーカと呼んでいる。対艦攻撃用装備。弾頭は先込式。

斧

ヒートホークのこと、シア・シエラ共に正式名称は知らない様子なので斧と言っている。斧の刃部分から高温を発し敵の装甲を溶断する格闘兵器。ルナチタニウム製のガンダムのシールドを叩き割り、ガンダムNT-1を大破させるなど、ともに食らえばガンダムといえど無事では済まない威力を持つ。

マシンガン

ザクマシンガンのこと、シア・シエラ共にやっぱり正式名称は知らない様子なのでマシンガンと言っている。正式にはM - 120A1と言っ(らしいです)120mm弾を使用し、1マガジンに332発込められる。

ロケットランチャー？

シュトルムファウストのこと、シア・シエラ共にやはり正式名称は知らない様子なのでロケットランチャーと言っている。宇宙及び重力下空間の双方で使用可能な使い捨ての大型弾頭ロケットランチャー！。

説明終わり、かなりアバウトです、分からないことがあれば、私の分かる範囲で答えます。

次回は

敗走する二人、とりあえず近くの基地の当てを考えながら休憩します。

敗走（前書き）

やっぱり更新早いです。

今回もあとがきには説明文を書かせていただきました。

目的地はオデッサ基地から北西にあるワルシャワ基地。

ザクの足では一日くらいかな・・・と言うつる覚えで書いてます。

敗走

「シアさん…少し休みましょうよ」

「絶対に駄目、半日もたつて、基地が掌握されたのはまず間違いない、だったらオデッサ周辺にもジオンが繰り出して来てもおかしくは無い・・・私たちがみたいな敗残兵を捕まえるために」

「でも半日の間ずっと機体を動かしてリーダーを睨んで・・・」
私のことを心配してくれているのは分かる、でも今気を抜くわけにはいかない。

敵の総数ははつきりしてはいないけれど、ジオンにとってほとんど始めての地球進出のはず、相当数の部隊を落として来たに違いない。
「あと半日、もう半日だけ頑張ったらワルシャワ基地につくの、私があと少しだけ頑張るから見守って」

「交代しよ！わたしもMS動かせるよ、シアさんみたく上手はないけど」

「大丈夫、信じて」

「わかった…頑張ってね」

私のことを信頼してくれているようですぐに信じてくれた。

確かに少しは休息したほうがいいのかもしれない、このまま戦闘になったら集中力を切らしてまともに戦えないと思う、実際のところすごく疲れている。

でも、何となく今はシエラにMSをさわらせてはいけない気がした。

もう日が落ちてきた、太陽が赤い。

シエラ必死になってリーダーとモニターを睨んでくれている。

「シアさん！あれ！」

「あれは…」

ミデアだ…それにデッサンも数機飛んでる。

「救難信号を出しましょう！」

「分かったシリア、・・・運がよかった・・・」

本当に運がいい、半日歩くところが何とかなるかもしれないからだ。それにここまで輸送機が来た、まだここまでジオンが進攻していない証拠でもある。

「一応、一安心かな？」

敗走（後書き）

ミデア

地球連邦軍の物資輸送任務を担っていた輸送機で、降着装置に低圧タイヤとダクトファンによるエアクッションを組み合わせて不整地への着陸も可能。

最前線への補給活動に最適な機体であった。

デッシュ

偵察機。早期警戒機として開発されたがミノフスキー粒子散布下では性能を発揮できず、遠距離索敵性能を生かして要人用高速連絡機として使用された。

オデッサ基地

3 / 2 にジオン軍に占領されてしまった基地。

占領された後は、鉱山地帯の中核を担っており、11月9日に奪還されるまで鉱物資源を宇宙に送り続けた。

ワルシャワ基地

オデッサより北西にある連邦軍の基地。

オデッサ奪還作戦時はオデッサ攻撃の拠点として多数の戦車、航空機とMSが配備されていた。

駆け抜けた先に見つけた小さな光（前書き）

今回もご覧になってくださってありがとうございます。どうぞゆっくり見ていてください。

今回はちょっとグダグダと言つか、うまく文章が書けていないかんじがします。

もっと頑張らないといけないなあと思いました。

駆け抜けた先に見つけた小さな光

「シア・レシユター兵長です、ミデア、応答お願いします」
「.....」

「こちら372補給部隊、所属と名前を」

粒子は濃くないらしい、通信はクリアで遅れもない。

「オデッサのシア・レシユター兵長です、オデッサ基地がジオンに襲撃され撤退していたところです」

「その話は本当か？シア兵長？」

「本当です戦闘のデータもあります」

「わかった、信号を出しながらついて来い、適当なところでミデアは停止する」

短いやり取りが終わり、指示された通りにミデアについていく。

適当に開けた場所まで来て、ミデアは着陸する。

「機械から降りてきてください」

そついわれて素直に、従った。

「はじめまして、シア・レシユター兵長です、隣にるのがシエラ・コール一等兵」

「私がこのミデアの指揮を任されている、それよりオデッサが攻撃されたのは本当なのか？」

「本当です、この機体にも戦闘の映像データが入っています」

「やはりか・・・」

そう言っ指揮官の男は考え込んでいる。

私としては、ミデアが飛んでいたことが不思議だった。

方向的にはオデッサへ向かっている様子に見えたけれど・・・

「私たちはオデッサへ向かっていた、襲撃の報告が本物か否かを確かめるためにね」

「なんで、もう半日たっているのに！」

「まあまあ落ち着いて、目で確かめないとやはり信用ならないだろ

うし」

この人のいつてることはもつともだと思えるけど、やはり納得いかない、信じる信じないじゃなくて、まずは対策を講じて、人のみを危険にさらすなって、幾通りもの反論が頭に瞬時に出てきたけど。ワルシャワの基地指令に何かを言われたときのために今の反論の数々は頭に残しておこう。

「いいたそうなことは大体分かったよ、それはおいといて、出来れば君たちを生き証人としてワルシャワまでお送りしたいのだけれどいいかな？」

艦長さんは寛大で、無理を言ってMSも持って行ってもらえるようになった。

「よかったですね、シアさん」

「うん、本当に運がよかった」

シリアのやわらかい笑顔を見ながら、そう思った。

無事に基地から脱出できて、このミデアと遭遇するまで敵とあわず、ミデアに乗り込めたこと。

安心感でいっぱいになった。

「あつと・・・」

疲れからか、壁にもたれかかろうとして後ずさりしようとして足を絡ませた。

「大丈夫ですか？」

「床の上でもいいのなら寝てもらっても構わないよ、敵がきたら叩き起こすからね」

寛容な言葉をいただいたので、言葉に甘えさせてもらおう。
すごい眠い・・・

よくよく考えたら、敗走と言うシュチュエーション、周りに敵がいるかもしれない恐怖、リーダーが正常に動いていないかもしれないと言つ不安、神経をすり減らしながら半日間モニターと睨み合い。

自分自身を褒めたくなる。
でも、とり…あえず…今は眠…い…

駆け抜けた先に見つけた小さな光（後書き）

ワルシャワ基地への道中。

無事にミデアに乗せてもらえて一安心の二人。

もちろんこのまま無事に返す気はありません、というわけで次回は新しいMSと人物が登場予定。

この場所を書くことではないのかもしれませんが少し・・・。

三話のあとがきとかに書いた質問ですが、貴重な意見をいただきました、ありがとうございます。反映できるかは正直不安ですが、精一杯頑張ります。

これからもよろしく願いします。

影

「敵輸送機らしき反応を確認、オデッサ方面へ向かっている模様です」

「そのまま追跡しろ」

「了解」

「・・・整地で輸送機が着陸しました」

細かい熱源がレーダーに散見できるがおそらく護衛の戦闘機だろう、報告する必要はないだろう。

数分後に再び輸送機が飛び上がる。

今度は逆方向に。

「輸送機の動きがおかしいです、先ほどと逆へ飛んでいます・・・帰還している？」

「ならばお前も帰還しろ、脅威は去ったと考えるべきだ」

「いえ、追跡を続行します」

「発見されたらどうするんだ？」

「迎撃、場合によっては撃破、もしくは撤退します」

「好きにしろ、だが機体だけは壊すな」

そこで通信が切れる、当たり前前だ、機体は絶対壊さない。

ピンと、金属みtainな音。

不可解な悪寒と言うか、頭の中に小さな閃光を感じた。弾けたような音と共に。

悪い予感の前触れなのだろうか？

ここ最近嫌なことが連続で起きている、と言うか嫌なことしかなかった。

そろそろ嫌なことを感知する超能力じみた物を授かっても変ではないかも。

「そんなわけではない」

自問自答はこのあたりで切り上げて。

「何か変なもの・・・この辺りにありませんか？」

「敵のことかい？そういったものは見かけてないしディッシュからもそんなものは・・・」

やっぱり私の思い過ごしのように、ナイーブになっているのかな？

「いや、ディッシュの索敵範囲を広げてみよう、気になるものがあったってさ」

端っこのほうにあるモニターを指差す。

モニターには土色の岩場に不釣り合いな青い色のザクのようなシルエツトがあった。

目を凝らしてみるけれど、頭のカメラの形が複雑になっていること。かなりの倍率で拡大しているのか、かなり不鮮明なものでその程度しか分からない、だけど明らかにおかしいものであることは分かった。

何だろう、何か開眼でもしちゃったのかな、厄介な能力に。

「万が一に備えて戦闘準備をしておきたいのだけど、悪いけどもう一度あの・・・もびるすーつって言うのかな？それに乗って外を歩いて欲しいんだ、すぐに戦える戦力がそれだけ増えるし、すぐに戦える状態にあるぞって言う脅しにもなるし」

「あはは・・・分かりました準備します」

「ここからコンテナの中には直接入れる、結構揺れるから気をつけてね」

さつきもそこから入ってきたので、MSの場所までは容易にたどり着けた。

かなり揺れるコンテナの中、四苦八苦しなから、MSのシートまで入り込めた。

すごく腰が痛い。

「ちょうどいい岩陰を見つけた、五分ほど降りる、すぐに出てくれ」
すぐにコンテナが開いた、仰向けの状態にしていたのを、足をずるずる動かしながら外に出る。

「無事に出ました」

「すぐにハッチを閉じて飛ぶぞ、装備の取り忘れはないな」

「大丈夫です」

「離陸する、疲れているだろうがあと一時間か二時間くらいだ、頑張れ」

「・・・動きがおかしい」

口に出して言った事に気がついてはいなかった。

まさか私が・・・

キロ単位で距離を離していたはず・・・

注意をして移動のときも岩場から岩場への移動を心がけていたのに・

・

運が悪いでは済まされない。済んではいけない。

どうにかしないと、このまま追跡を続けるか、諦めるか。

自分から、追跡の続行と言っていたのに引き下がる訳には行かない。

少なくとも、交戦は避ける、でも追跡は続ける。

作戦でもなんでもない考え、でも何か考えないと頭が持たない気がした、何も無い空っぽのままだとそのまま消え入りそうに感じた。

・・・哲学まがいのものを今考えている場合じゃない。

倒さないと。今ならまだともに戦える。

たかが輸送機と戦闘機、一人でも蚊を落とすように壊せる。

シミュレーションでも、実戦でも、私なりにやってきたはず。

マシンガンの状況を確認した。

目的が怪しい敵の追跡から敵の殲滅に変わっていた、そのことに気がつかなかった、もちろん目的がどうしてかすり替っている事にも

気がついてはいない。

影（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございます。

新キャラ登場、とりあえずはシア、シエラとこの子もいれて三人を主軸に話を進める予定。

とりあえずは新キャラ子の設定はなし、これから詳しく語られた時にでも書きます、今は謎のMSパイロットとでもお考えください（実は設定がまだ出来上がっていないだけなんです、こんなものを見切り発車って言うんですかね？）。

新キャラのMSは多分マニアックな部類のに乗せてます。

次話くらいのシアの台詞をヒントに考えてみてください（この時点でも分かる人は分かるかな？）。

次回、謎の敵が・・・

死の恐怖

「ちくしょう、撃ってきたぞ!!」

音がした、今まで何度も聞いてきたMSのマシガンの音。考えるよりも先に体が動いた、敵のいるところまで行く。

デッシュを狙っているようでマシンガンを空に向けて撃っている。初めて敵の機体をまじまじと見つめる。

肩や腰にレンズ、頭にはぴょんと飛び出た細い棒。

どう考えても戦闘用の機体ではない。

たとえMA対MAの戦いでも、この相手には勝てると、安易に考えた。

そして私は武器を取った。

人死にを出さないために。

バズー力を構え青い色のそれに狙いをつける。

ドオンと、もはや慣れた反動を受け流し次弾を込める。

急に目から火花が散った、チカツと。

その後でガキインと金属のぶつかる音を遠くに感じた。

頭が痛くてたまらない、何が起きたのか、ひたすらそれを知りたかった。

目を見開いて、見たつもりが何も見えない。

「シアさん！早く動いて!!」

そう言われてやっと動けた。

何故かMSが寝転んでいた。

早く起き上がらないと!

焦る。

どうしてこうなったのか、それは攻撃を受けたから。

でも十分に距離は離れていた、格闘戦は出来ないと考えていた距離だったのに。

焦る、敵は何なのか分からなくなったから。

ようやく半身を起こした、そして、驚いた。

MSが高く飛んでいた、背中のエンジンみたいなのを小刻みに動かして滞空していた。

集中してないと本当に殺される。

わけの分らない兵器に殺される。

倒れたときにはばら撒いた武器を何かしら掴み上げる。

狙いもよくつけず、それを撃つ。

「当たれ！」

ボヒュと間抜けな音こそ立ててはいたが、バズーカを撃った時のものと比べられないほどの振動が襲ってきた。

自身のダメージも大きかった、しかし収穫はあった。

相手は予想外の反撃に驚いたのか近づいてこようとはしない。

右手にマシンガン、左手に斧を持つ。

マシンガンを闇雲に撃ちまくりながら、ダッシュで近づく。

まるで昔見たアクション映画のワンシーンのように動いていた。

「格闘なら、機動力なんて関係ない」

声が震える。

ザクがひたすらに駆ける。

メートルで距離200、170。

今更、マシンガンを構えだした。

マシンガンの弾が装甲をガンガンとノックしているのはよく分かるでも、当たり前だけど、引くことは出来ない。

メインモニターが敵との距離を詳細に表示してくれる、100、75。

全力で動かしているはずなのに、数字の減少が遅く感じる…

斧を振り下ろした。

周りなんかもう見えていない。

敵のMSの右腕が切断された。

切断面が赤く光る。

逃げるなら早く逃げて。

そう願った、壊すのが・・・面倒くさかった。

ザクは、そのまま引き下がる。

背中を向けて、一目散に。

どっと気が抜ける。

たった一分か二分かの短い戦闘。

なのに、焦ってばかりで、ついさっきの出来事なのに何も頭の中に残っていないような気がした。

私は駄目だって、思った。

自分の命すら無くなるんじゃないか、さっきの戦いでそう思った。

近いうちにジオンも連邦もMSか、もしくはそれに近い何かを作っていく、ザクと言うMSに乗った私には確実にこれからMSと付き合うことになると思う。

そうなって私は、どうなるのか。

死にたくはないけど、死んじゃうんじゃないか？

シエラを残して、もしくは殺してから。

暗い妄想しか出来なかった。

慣れたと思っていた恐怖（故郷が無くなった時に感じた恐怖、戦車に乗っていた時に感じた恐怖、オデッサ基地で皆から嫌がらせを受けたときの恐怖、幼い時のもの、つい最近のもの、記憶の中にある全ての恐怖）が、それらがたった一度の体験でありありと蘇った。

死の恐怖（後書き）

深夜一時のテンションで三十分で仕上げました。

読んでみるとどこかおかしいはずなのに、書き直そうとすると違和感を感じない。変だけど直せないと言うよく分からない話になります。

修正するのを善処したつもりですが、今回の話は読みにくいかもしれません。

今回登場したMSですが、ヒントが今ひとつ少ないかもしれません、前回の後書きにあれだけ書きましたが、すみません、力不足でした。機体名は出せませんが、追加でヒント、MS-06の派生機で、MSVで作られた（登場した）機体です。

今回もここまで読んでくださってありがとうございます。
次回、やっこの思いでワルシャワ到着。

生還した奇跡（前書き）

今回は「」を増量して書いてみました、その分、文字も増えています。
ゆっくり読んでみてください。

生還した奇跡

そつと目を開けた。

頭がズキンと痛む。

「ここは・・・ミデアじゃない？」

虚ろでぼんやりとした記憶の糸をたどつてみた。

考え、思い出そうとした、けど、あのザクが逃げていくところ記憶は途切れて。

「あれゝ？ここはどこかな？」

なんて陽気な声を出そうと試みるも、失敗、何か恥ずかしかった。とりあえず、外に出よう。

少しふらつくけど、大丈夫だよね。

ここはかなり広い、仮眠室か休息室か何かだろうかな、たくさんベツトやベンチが置いてある。

ここがもしジオンの場所ならこんなところで連邦の私が寝ているわけがないし、かといってワルシャワとオデッサを結ぶ中継基地なんて聞いたことないし。

やっぱりここはワルシャワ基地なのかな、私の中ではそういう結論になった。

通路に出るであろう扉に手を書け一考した。

出歩いてても大丈夫なのかと。

大丈夫だと思う、特に根拠なくあつさり思った。

少しだけ、扉を少しだけ開いて外を見てみると…

「シアさん！大丈夫なのですか！？」

私の耳元で大声を上げるシエラがいた、目の前に。

「少しふらつくけど、あと声大きいよ」

「ごめんなさい、あの、どうしてか知らないけどシアさん眠っちゃつてて、起きてくれて嬉しいんです」

「疲れてただけ、多分大丈夫だから」

「うん、よかったです」

「おや、ちょうどいい、今起きたところなのかい？」

通路の奥の方から、わたしたちを送ってくれたミデアの艦長が来た。

「はい」

「大丈夫そうで何より、とりあえず少し先のことを話したいからさ
つきの休憩室に行つて」

と、私がさっきまでいたベットだらけの部屋を指差す。

私とシエラはそそくさと、休息室に入った。

「今は朝の四時！シアさんはともかくシエラさんは眠たいだろうから、丸一日の休暇を貰ってきた」

シエラが眠い？という言葉が耳に残った。

「ずっといてくれたの？」

「はい」

ちよつとした疑問はすぐになくなった、ずっと寝ずに私を心配してくれていたようだった。

「でも、一日は・・・オデッサがなくなつたんですよ」

「いや、実はオデッサから逃げてきた人が多くてね、その処理つて言うのが裏の話、君たちに手伝ってもらうわけには行かないし、手伝えることもないだろうしね」

「・・・はあ」

棘のある言い方が、少し気にかかる。

「と言うわけで、今日は好きにしてくれて構わない、ここは何なのか、この人は誰なのか、わからないことがあれば連絡して、携帯端末くらいは二人とも持つてるよね？夜までは暇してる予定だから」

「分かりました」

「そつえば、名前聞いてないです」

シエラが大切なことを突拍子もなく言ってきた、そつえば名前を聞いてない。

名前を知らないことと、知らないことを知らなかった私の間抜けさ

を感じた。

「エミル・パラディン、エミルでいいよ、浅くはない仲だし、一応大尉でミデアの艦長もしています」

かぶりを振って言う。

「エミルさん・・・頭の中にちゃんと入れておきました！」

「忘れないでくれよ、君たちの命の恩人なんだからね」

…私にはエミル大尉の性格がつかめない、奔放としているようだと時折厳しいと言つか、きついことを言ったり。

「ってシエラせめて大尉をつけなさい！」

「あつ・・・ごめんなさい」

そう言って、慌てて頭を下げる。

私たちは軍人で上の人間には絶対、少なくとも連邦の中では、絶対ではないかもしれないけれど、好ましいことではないのは明らかだと思う。少なくとも連邦軍に入隊したあとの十日間の訓練でそれだけは教え込まれた。

「いや、構わないよ、可愛くて美人な女の子に名前を呼んでもらえるのって、こんなところじゃそうそうないからね」

・・・シエラだったら、相手が大将でも元帥でも私に話すように語り掛けそうで怖い、ある意味この人に拾われてよかったかも。

「じゃあ、最後に一つ、まだ君たち用の部屋が無いんだ、男たちの部屋に放り投げるわけにもいかないからね、私が強く言っておいた都合がつくまではこの休憩室で寝ててくれなかな、明日にでも部屋は出来ると思うから」

私たちのためにしてくれた、ほんの少しだけ、私はエミル大尉を見直した。

「本当にありがとうございます、大尉」

「いや、女の子をほおって置けないだけだよ、じゃあ、話は終わり、今日は解散！じゃあね！」

生還した奇跡（後書き）

前書きにも書いたように「」を増やしてみました、書くのは大変でした・・・

今回はワルシヤワ基地到着！・・・なのですが、ワルシヤワ基地に関する情報が調べてもかなり少なく、これから書くワルシヤワ基地は私の想像なので注意してください（今後もちろん調べていくつもりです）。

次回、ワルシヤワ基地の中を探索させます！

基地探検（前書き）

何とか書き終わり、今回は特に進展のない回、短いし。

最初に言っておきますが、ワルシャワ基地内部は私の妄想です、たぶん（と言つか絶対）私の書いているような構造ではありません。

基地探検

端末に番号だけささつと入れて、大尉は部屋を出て行った。

「ごめんなさい、シアさん…私眠い」

あくびをしながらシエラが言う。

「気にしなくてもいい、ゆっくり休んでいいよ」

「ねまああすう……」

気の抜けた声をあげ、ベットへ寝転ぶ……

すぐに寝た、本当にすぐ、秒単位で、三秒ぐらいで。

布団をかけてあげて、休憩室を出た。

どうしようか、ここの構造よく分からないし、人がぜんぜんいないし……

ピピピ……………

端末が軽快な音をたてた。

『ここの地図送っておいた b ω b』

人は少ないが、ここはあんまり大きくないし迷うことは無いと思うけどね『

メールとここの見取り図という名の画像が来た。

とりあえず感謝はしておいた。

「えつと…」

地下二階、地上二階。

来たことは無いけれど、軍の施設としてはかなり小規模だ、オデッサからの進攻という目の前の脅威ができた以上、多分一気に大きくなると思うけど。

二階全部が司令室、ここが一階、休憩室や食堂、ミーティングルームなどがあって、兵舎が地下一階、二階が……

表示を読んで驚いた。

モビルスーツ研究室。

連邦のMS研究所なのか、ジオンのMSを研究する場合なのか、どちらかは分からないけど、連邦軍がそんな施設を作っているのが嬉しかった。

1年位前の記憶が蘇る。

その頃はジオン側ではすでに活躍していた人型兵器、その人型兵器の有用性についての論文をまとめていた。

結局、連邦軍に持ち込むことは出来たが、非現実的などろくな反論も無く全部突っぱねられた。

後に持ち込んだ装甲車に関するまとめは非常に高い評価であったが…

「…ひまがあつたら行ってみよう」

久しぶりにわくわくした気分になった。

私が考えているような研究をしているわけではないかもしれない、仮に私の思うMSを作る研究施設だったとしても、一介の兵士である私が入れるかどうかは分からない。

希望はあまり持たないでおこう。

とりあえず、私たちの持ってきたMSはどうなったんだろう。

それだけ少し気になった、外に兵器の倉庫があるし…行ってみよう。

基地探検（後書き）

前書きにも書いたように、ワルシャワ基地内部は私の妄想、資料がないんですよ・・・

シアの少し昔について少し出ていますが、なんで論文かけるほど当時からMS知ってたのかというと・・・

まあ戦争以前から勉強していただけあって、ジオニックス社とかあたりのコネでもあったんじゃないの？（と言っ予想）

次回、シアがいろいろ言われ（謂れ）ます。

罵倒（前書き）

急いで書き上げましたよ・・・自分で読み返しては見ましたがやはり心配。

誤字脱字注意。

黒倒

あんまり想像していたよりも、物が無かった。

航空機が20数機、戦車が30輜くらい？

それらを運ぶ他にも、人員や重要な機材も運ぶ事の多い、輸送機ミデアなんかは2機しかない。

そんな何がいいいたいかと言うと。

その程度しか兵器が無いのに兵器庫がぎゅうぎゅうであるという事。と言うか、何で戦車と戦闘機と輸送機が一緒のところ突っ込んであるのだ？

MSは一番手前で仰向けに置いてた。

スペースが無いところに無理やり突っ込んだらしい。

今日は何もしなくてもいいといわれていたけど、それなら明日からは何をしていくんだろう。ちよっと見当がつかない。

「オデッサからまた人が来たぞ！！」

大きな声が聞こえた。

ミデアが着陸していた。

オデッサから逃げてきた人がミデアに乗っているらしい。

外が一気に騒がしくなった。

ミデアから人が降りてくるのが見える。

・・・オデッサからの人間とは会いたくなかった。

ここに来たってことは、これから頻繁に私のことを知っている人に会うはず。

ただ嫌なことを先延ばしにしているに過ぎない。

格納庫から出てみた。

どこにMSがあるのか分かったからもう用事もないし。

「お前・・・」

なんと運の無いことだろうか。

声の方にいたのはシエラに御高説を述べていた男だった。

そのまま無視して通り過ぎようとしたけれど、男の方は許さなかった。

肩をつかまれた、かなり強い力で。

「なんか言わねえのかよ？」

「何を？」

男は肩を震わせている。

「お前がいたから、オデッサが」

そんなわけない、私がジオンと連絡でもとってるの？

なんて言い訳が出たが、この怒り方なら『そうに違いない』と躊躇うことなく言い出すと思った。

シエラを落착着かせるために言ったあの言葉、自分でも言っていて納得したが・・・ここまで言われると、撤回したくなる。

「何か言えよ、疫病神！」

死神から疫病神へとランクアップしてみたいだ。

人がぞろぞろと集まってくる、当たり前か、かなり大きな声で騒ぎ立てているから。

中には私を見てひそひそと話している人もいる、オデッサの人間だろうか。

「一人で死んでたらいいいんだよ！！死神が！」

何も言わない私を見てか、脅しかけるように叫び上げた。

周りの人間は彼に同調するかただおどおどしているかに分かれている。
私の話を知る人
噂を知らない人

頭の隅でこれはまずいと考え始めた、このまま、騒ぎが大きくなったら暴力沙汰にだってなりかねない。

「はいはい、そこまで」

パンパンと手を叩き、大きい声をあげ仲裁に誰かが入ってきた。

あの大尉だった。

「話はここまで、解散しないと後でゆっくりお話しする羽目になるぞ？」

「仕方ない・・・」

「守るような人間じゃないのに・・・」

誰もが口々に思いを言いながら、その場をはなれる。

最初に突っかかってきた男だけはここから離れることを渋っていたが、大尉が睨むと離れていった。

「もしよろしかったら、お茶でもしませんか？」

大半の人がいなくなつてから、クルリと振りむきこつ言った。
やっぱり何を思っているのかはやっぱり分からない。

罵倒（後書き）

オデッサでシアがいろいろと言われるお話。

一話二話の頃のシアを思い出だしながら書いたよ。

次回、少し昔話でも（たぶん・・・）

無駄に長い世間話（前書き）

今回ちょっと難産でした、いろいろ考えた末のこれなのですが、ぶ
っちゃんけ読まなくても今後の展開ついて支障は無いと思います（汗）
。

無駄に長い世間話

「今日は何も用事無かったよね？」

「はい」

食堂の方につれて来られていた。

さつき、今日は何もしなくてもいいと言っていたし、すでにここまで連れてきていて今更、いつもの様に考えてしまった。
口をつむぐ。

「コーヒー二つ、できたら持ってきて来て」

食堂の係りらしい人にそう言って、私には適当に座るように促した。

「ここはおいしいよ、いろんな国の料理あるし・・・」

「あの...何かお話があるから、呼ばれたのでは？」

私が言いだして、やっと食堂の自慢話をやめる。

ちなみに営業時間が長いだの係りが良い人ばかりだの食材はどこどこ産だの（合成はほとんど無くその上二割が地球産だと言っていた、これにはちよつと興味が湧いたが...）言っていた。

「で、まあ本題なんだけど、なんで騒ぎがあつたのかな、と？」

まあそんなところだと思った。

「私の経歴は知ってますか？」

「まあ、ちよつと見たよ、戦車隊にしばらくいた、程度のことだけ」

「三度でしたっけ？私の所属していた隊が私を除いて全滅」

「そこまでの危機になってなお生き残れた優秀な人間だと思った・
・やっぱり個人的には、疎まれる理由がしょぼいように思えるんだけどなあ？」

そう言ってコーヒーに手をつける。

いつの間にか出来ていた、私の目の前にも一杯のコーヒーがある。
このことについては、自身でも、まえまえから少し疑問だった。
どうしてこんな目にあうのか。

戦場で人が死ぬ、耐え難いことかもしれないけど、当たり前のこと。十数人の人間の死に目を見てきただけって・・・十二分に多いかな？
『私のすぐ回りでたくさん人が死んで気味が悪いから近づかない、向こうの方から近づいてこないようにするために、うるさく喚きたててイジメ、自分から近づかせないようにする。』
さて、理由がもう出来た。

…この考えかた以外の、私の境遇への理由付けができない。

「噂になるには十分にインパクトのある話だと思います」

そんなものなのかな、そう言ってまた、大尉は考え込んだ。

ちよつとだけ、もう一つの可能性を思いついたがすぐに否定した。

彼女と会ったのは二日か三日か前の話、私の噂話ができしたのはもっと前だから絶対違う。

「そういえば、出身はどこだい？」

・・・ここが地球連邦軍だからかな？

すこし、見えたような気がした。

「サイド2です」

「いわゆるスペースノイドってやつか、しかもよりによって地球に落ちてきたコロニーの」

やつぱり・・・

「戦争を起こしたサイド3の人間と同じ宇宙の人・・・それに加えて気味の悪い話・・・とわいえ、これを繋ぐのは少々こじつけが過ぎるかな？」

「でも、理由ではありません」

「まあ、考えても人の心は分かんないか、今日はもうやめよう、ごめんね長いわりに実の無い話で」

「いえ、自分のことを考えてよかったです」

「まあ、思いつめないようにね、こつちも注意するよこれ以上あらぬ話を出させないように、中途半端に手を差し出しちゃってそのまま放置はいただけないかな？この基地にいる間はなんでも協力するよ」

最後にいろいろ捲し上げて、大尉はいつてしまった。

無駄に長い世間話（後書き）

今回はサブタイトルの通りただ単にシアの事について世間話をしただけ。

ま・・・まあ焦って展開を進めてもね？戦争はまだ半年以上もあるのですし。

次回は・・・どうするかぁ・・・？

身体検査、と言う名目のNT検査の話を少しするか。

少し時間を進めて（4月頃まで飛ばして）、新展開にするか・・・

∴次回が書き終わるまでのお楽しみと言うことで・・・

大尉さんについては次回あたり設定公開予定・・・？

真夜中の連絡事項（前書き）

会話を増やすことに苦心した回。
会話だけで話をつなげるのも難しいね。

真夜中の連絡事項

深夜に私の携帯端末が震える。

・・・メール？

機械で光る画面の文章には

『地下二階、MS研究室前にて』

送り主は…大尉。

時計はこの時間で2時を指している。

こんな深夜に呼び出しとか、いろんな意味で嫌な予感しかない。
銃ぐらいは持っていていったほうがいいかな？

「やあ」

さわやかに手を振る人がいる、もちろん大尉だ。

「シリアについてはシリアに直接聞いてくださいね」

「いや、そういうわけじゃないんだよ」

「夜中にメールとか、私は大尉の愛人ではないのですが」

ちがうちがうと手を振り、私の後ろを指差す。

「今度は何ですか・・・」

と、後ろを振り返ってみる。

「ガリル中将？」

名前だけぽつんと言ってみたが実感が湧かない。

大尉が私をここに呼んだのはこの人に合わせたいからだよね？

でも基地指令さんですよ、この基地では一番上の人間がなんで？

そうやって呆^{ほう}けていると、中将の口が開いた。

「・・・大丈夫なのか？エミル？」

「ええ、もちろん、あなたも彼女の戦闘映像は見ましたでしょ？」

「いやあ、そうなんだが・・・」

懐疑的な目で見ている中将の視線と目があい、ハッと我に返る。

「そういえば、私はなぜ呼ばれたのですか？」

「いやね、あのMSの戦闘記録やら戦闘データをここにいるんな人に見てもらってりしてただけだね、あのジオンのMSがすごくうまく使えてるんじゃないか？ 見たいな話になつてね」

「大方すでに察しているんだろうが・・・」

「端的に言つと、これから連邦が作ると思われるMSのパイロットとして、働いて欲しいって言うね」

「私はMSの知識は多少ありますが、MSの操縦については慣れているとは自分でも思えません、何より相手のMS一機に半死半生です到底戦力になるとは思えません」

二人の上官は私の発言を聞いて、首をかしげる。

「十分に戦力になると思うけどね、最終的にはあのMSにも勝つてたし」

「まあ、戦えてると思つたな、とりあえず君が戦車に乗つてた頃の戦果よりはぜんぜんましだな」

大尉が中将を肘で小突く、私に配慮したのだろうか？

「まあ、これからかなり先の話だし、連邦製のMSが出来るかどうかもわかんないし、拒否もまだ出来るし、一応君に伝えておこうつて話なだけ」

・・・

「一つ聞きたいことがあるのですが」

「いいいいいよ、なんだい」

「シエラはどうするんですか」

一番の疑問を聞いた、シエラのことを。

「私がMSに乗ることになつても彼女を戦わせたくは無いです、もしかしたら彼女も連れてMSに乗せて、なんて思つて」

「それはないと思うよ、自分から志願したりしない限りはね俺たちはあくまで君に乗らないかと持ちかけているだけ、シエラ君にけしかけるつもりも無いよ」

「ありがとうございます、例の件については自分でよく考えておきます」

「シエラも連れて行きたい、とか言い出すと思ったんだけどなあ・・」

俺は胸ポケットに突っ込んでいた二枚の紙を取った。

「エミル、今一度聞いておくが何で彼女なんだ？」

「ジオン製MSの戦闘記録を見ただろ、強かった、ついでに実戦経験という箔もついた」

「んなもん他の正規の鹵獲MS部隊にでも任せりゃいい、わざわざ年端のいかねえ女の子を戦地に放り出すまね、気分が悪い」

「んなもん大尉の俺が知るわけねえでしょ、將軍に直接に聞いてくれば、案外そんな趣味なのかも知れねえだけかもな」

「そんなものだったら俺以外の奴らがすでに立ってるさ」

壁にもたれかかって一服しようとした俺を中将殿が遮った。

「ここでのタバコは俺ですら自重してんだが」

「すまんね」

そう言つてタバコをしまう、そーいや火を持って来てなかったからどの道吸えないことに今更気がついた。

「それはなんだ？」

俺の持った紙を指差す。

「彼女の推薦状と…3月の健康診断の結果と処方箋」

「嫌な予感しかしないんだが、一応きこつ、渡さなくてもいいのか？」

「彼女には毒でしかない、一番大事なのはこんな薬より彼女の意味だろ」

真夜中の連絡事項（後書き）

お久しぶりです、今回からやっとMSの話が本格的に出るかもしれませんが、そこからが長くなる可能性もあります。

さて、今更ながらガンダム×百合（というか恋愛）の難しさにきがついてきた、上手く書けるかは元よりかけるかどうかすら分かりません（汗）、何とかして絡みも多くしたいですねえ。

最後の薬の話、ガンダムAで連載していたTHE ORIGINの単行本8巻を読めば分かるかと、あれのものとは違います。

わからない人・心（前書き）

何とか書き終わり。

遅くなったのは、今回の話はいろいろ悩んだからで、何に悩んだかと言うと、今回は明るい話から、かなり暗い難しい話に方向転換したからで。

書き方とかに苦勞したので誤字多いかもです。

わからない人・心

今日の分の仕事が終わる、ほっと一息つく。

ずっとPCの前に釘付け、前からやっていたことではあったけど、
こつも連日続くと目とか痛い。

もう夜・・・

時計を見て少し憂鬱な気分になる。

・・・両親がサイド2コロニーの一つ、アイランド・イフィッシュ
と共に無くなっておおよそ3ヶ月。

ドラマのヒーローみたいに敵国に復讐したいとは思わないけど、や
るせなくはなる。

なんか・・・ボケツとしているのがいやだ。

立派なちゃんとした仕事であるのは分かってるけど、何だか割り切
れないところがある。

「お腹減った」

そう言ってグダっていた自分に命令を与えた。

問題の先延ばしともいう。

『自分は何を考えているのか』自身でも分からない。

「シアさん！」

シエラが目の前にいた。

「待ってたんですよ、一緒にご飯いこ！」

と、手を引く。

ずっと待っていてくれたのかな？

それは嬉しい、すごく。

「お腹減ってない？」

「減ってますよ！でも、シアさん待ってたんです、いつも二人で食
べてるじゃないですか、今日だけ別々つても嫌なんです」

「...ごめんね？」

「謝って欲しいんじゃないんですよ、早く行きましょ」
そう言って、私の手を引く。

「お肉ですよ！お肉！！」

「大きな声を出すな」

ここでは好きなものを頼めない、献立があり、毎日それに沿ってメニューが出てくる。

基本的に肉は何故かあまり出ないのだが…
たまに出るとシエラがすごくうるさい。

「腐っても兵隊ですからね、体作りの基礎、肉をもっと出してもいいと思うのに」

「私たちはもう表には出なくていいって大尉が親切してくれたですよ？それを無に帰す気？」

「・・・シアさんはいいんですか？」

上目使いで私を見ている。

「私は大丈夫、コロニー産の合成に比べたら野菜も魚もすごくおいしいしね」

率直な感想を言ってみた。

どう考えても、作られたものと違い、味がちゃんとすることこの食事がおいしい。

「そうじゃなくて・・・戦わなくていいんですか？」

意外な質問だった、私に戦って欲しいのだろうか？

「命の危機に瀕することが無くて、いいよ、あの噂がたつことも無くなったし」

死神といわれることは無くなった、戦場に出ることが無いからだろう。

出来ることならこの噂はそのまま消えて欲しい。

「それよりも、早く食べて寝よ、明日も早いし」

「・・・」

黙り込む、何が気に食わなかったんだろう？

考えてみた、ちょっとした答えが出た、少しぶっきらぼうだったかも知れない、だから私の反応に怒ってる。

違うね・・・たぶん・・・

シエラは少しして、黙々と食事を口に運ぶ。

何かいけないことしたかな？

考えてみたけどわからない、...わからない時点でダメか。

悶々と、何だか分からない気持ちに包まれている気がする、私もシエラも。

一ヶ月以上たっているけど、二人一緒に過ごすことも本当に沢山あったけど、わかんない。

「ごめん...」

ぽつんと口から言葉が出ていた。

無意識の謝罪だった。

「私の方が悪いんです、なんかだか、頭の中がグルグルしててわけわかんないんですよ、だから無意識に怒ってたみたいです」

何だか今になって気がついた、私は一ヶ月の間、何かをなくしたのかもしれない。

私もシエラもなんだか、今までと違って、親しくない人と話すみたいに他人行儀になっている。

「シアさん、変な事聞いてごめんなさい」
ベットの上で言う。

「大丈夫、私も変にいらしてたみたい」
そう言っ、シエラに顔が見えるよう、二段ベットの二段目から顔をのぞかせる。

「シアさん、あのね？一緒に寝て欲しいの」
「・・・いいよ」

ゆっくり、音をたてずに下に降りる。
地に足がついて、そしたらちよつと思つた。
きつと不安なんだ、そして私も不安。

この戦争で、生きているだけでいいのか？と、私は今考えている。
シエラも、何かを考えてそれを解いているんだ。
それを考えていこう。

暗い室内で、そんなことを思っていた。

わからない人・心（後書き）

ひたすらに自分の文才の無さを恨んだ回です（笑）

文法的な間違い多そうで怖いです。

うまく書けていないかも知れない、正直なところ、今回のお話は自分でも何を書きたかったのか分かってない節がありますorz。
とりあえず、「何か難しい話してるな」程度に考えてください。

活動報告にて主人公たちをGジェネの能力で表してみたを公開します。

興味があれば見てみてください。

次回、何の前触れも無く・・・

真夜中の連絡事項（前書き）

会話を増やすことに苦心した回。
会話だけで話をつなげるのも難しいね。

真夜中の連絡事項

深夜に私の携帯端末が震える。

・・・メール？

機械で光る画面の文章には

『地下二階、MS研究室前にて』

送り主は…大尉。

時計はこの時間で2時を指している。

こんな深夜に呼び出しとか、いろんな意味で嫌な予感しかない。
銃ぐらいは持っていていったほうがいいかな？

「やあ」

さわやかに手を振る人がいる、もちろん大尉だ。

「シリアについてはシリアに直接聞いてくださいね」

「いや、そういうわけじゃないんだよ」

「夜中にメールとか、私は大尉の愛人ではないのですが」

ちがうちがうと手を振り、私の後ろを指差す。

「今度は何ですか・・・」

と、後ろを振り返ってみる。

「ガリル中将？」

名前だけぽつんと言ってみたが実感が湧かない。

大尉が私をここに呼んだのはこの人に合わせたいからだよね？

でも基地指令さんですよ、この基地では一番上の人間がなんで？

そうやって呆^{ほう}けていると、中将の口が開いた。

「・・・大丈夫なのか？エミル？」

「ええ、もちろん、あなたも彼女の戦闘映像は見ましたでしょ？」

「いやあ、そうなんだが・・・」

懐疑的な目で見ている中将の視線と目があい、ハッ和我に返る。

「そういえば、私はなぜ呼ばれたのですか？」

「いやね、あのMSの戦闘記録やら戦闘データをここにいるんな人に見てもらってりしてただけだね、あのジオンのMSがすごくうまく使えてるんじゃないか？ 見たいな話になつてね」

「大方すでに察しているんだろうが・・・」

「端的に言つと、これから連邦が作るとされるMSのパイロットとして、働いて欲しいって言うね」

「私はMSの知識は多少ありますが、MSの操縦については慣れているとは自分でも思えません、何より相手のMS一機に半死半生です到底戦力になるとは思えません」

二人の上官は私の発言を聞いて、首をかしげる。

「十分に戦力になると思うけどね、最終的にはあのMSにも勝つてたし」

「まあ、戦えてると思つたな、とりあえず君が戦車に乗つてた頃の戦果よりはぜんぜんましだな」

大尉が中将を肘で小突く、私に配慮したのだろうか？

「まあ、これからかなり先の話だし、連邦製のMSが出来るかどうかもわかんないし、拒否もまだ出来るし、一応君に伝えておこうつて話なだけ」

・・・

「一つ聞きたいことがあるのですが」

「いいよいいよ、なんだい」

「シエラはどうするんですか」

一番の疑問を聞いた、シエラのことを。

「私がMSに乗ることになつても彼女を戦わせたくは無いです、もしかしたら彼女も連れてMSに乗せて、なんて思つて」

「それはないと思うよ、自分から志願したりしない限りはね俺たちはあくまで君に乗らないかと持ちかけているだけ、シエラ君にけしかけるつもりも無いよ」

「ありがとうございます、例の件については自分でよく考えておきます」

「シエラも連れて行きたい、とか言い出すと思ったんだけどなあ・・」

俺は胸ポケットに突っ込んでいた二枚の紙を取った。

「エミル、今一度聞いておくが何で彼女なんだ？」

「ジオン製MSの戦闘記録を見ただろ、強かった、ついでに実戦経験という箔もついた」

「んなもん他の正規の鹵獲MS部隊にでも任せりゃいい、わざわざ年端のいかねえ女の子を戦地に放り出すまね、気分が悪い」

「んなもん大尉の俺が知るわけねえでしょ、將軍に直接に聞いてくれば、案外そんな趣味なのかも知れねえだけかもな」

「そんなものだったら俺以外の奴らがすでに立ってるさ」

壁にもたれかかって一服しようとした俺を中將殿が遮った。

「ここでのタバコは俺ですら自重してんだが」

「すまんね」

そう言つてタバコをしまう、そーいや火を持って来てなかったからどの道吸えないことに今更気がついた。

「それはなんだ？」

俺の持った紙を指差す。

「彼女の推薦状と…3月の健康診断の結果と処方箋」

「嫌な予感しかしないんだが、一応きこつ、渡さなくてもいいのか？」

「彼女には毒でしかない、一番大事なのはこんな薬より彼女の意味だろ」

真夜中の連絡事項（後書き）

お久しぶりです、今回からやっとMSの話が本格的に出るかもしれませんが、そこからが長くなる可能性もあります。

さて、今更ながらガンダム×百合（というか恋愛）の難しさにきがついてきた、上手く書けるかは元よりかけるかどうかすら分かりません（汗）、何とかして絡みも多くしたいですねえ。

最後の薬の話、ガンダムAで連載していたTHE ORIGINの単行本8巻を読めば分かるかと、あれのものとは違います。

ちよつとした決意（前書き）

前回にMSの話を出したけど、本格的に出るのは7月。
さて3ヶ月。

うゝん・・・

ちよつとした決意

「おはようございます、朝ですよ」

シエラの優しい声が聞こえて目が覚めた。

「う……ん……」

眠り眼をこすって目を開く。

……変な時間に起こされたから中途半端にしか眠れていない。

「ふあああ……」

「あくびなんてめずらしいですね？大丈夫ですか」

「寝つきが悪かっただけみたい、心配しなくてもいいよ」

そう心配がるシエラに言った。

言いふらすな、とは言われては無いけどたぶん言うのはまずいかな

…？

睡魔に襲われながらいつものデスクワークの仕事をする。

机仕事も軍の立派な仕事、何とか乗り切って今は昼過ぎ。

少し休憩を取った。

結局のところシエラには言えずじまい。

言ってもいいものかと悩んだのもあるけど、シエラを戦わせたくないと思ったから言わなかったんだけど。

言うべきなの？

戦わせたくないなんて、私が勝手にそうさせているだけし。

言わないと怒ってしまうだろうし、でも言ったらおそらく私について行きたいと思うだろうし。

でも……どうしたら……

私はシエラに対してどうすればいいか分からない、そこでシエラと合ったあの日を思い返してみた。

シエラと会って一ヶ月、短いようでいろいろあった一ヶ月。

私はシエラに支えられた、シエラに自覚はないかもしれないけど。オデッサで、私は死にたいと願うくらい困っていた。

そこにシエラがいきなり現れて。

私の身の上話を聞いて、それで私に感情移入して泣いてしまうくらい純粋なシエラの気持ちを見た。

シエラは私を心配してくれていたことが分かった、だから心配してくれている人の存在に安堵して私は立ち直れた。

シエラがいなければ、いたとしてもシエラの気持ちを見ることができなかったら。

私はきつと何にもしないまま死んでたかも。

そこから私は何とかして恩返しがしたいと思い始めた。

まず始めたのは、シエラを戦闘から引き離すこと、少なくとも私の前で戦いに触れさせないようにしようとした。

オデッサ撤退時もそう、ワルシャワに来てからもそう。

私の前では武器、兵器の類は目に入らせせないようにしている・・・

・・・今更かもしれないがこれは私のエゴかもしれない。

シエラだって元ジオンだった。

軍にいた以上、何かしら信念を持って戦っていたのかもしれない。

だとしたら私のしていることは、ただの邪魔でしかないわけで・・・

話の脱線を修正しよう。

要するに、シエラにこの件をどう話すか、そしてこれからシエラにどう接するかのこと。

私のしたいことは、少なくとも今はシエラへの恩返し。

…シエラと話をしよう。

私は戦いたい、ジオンと戦うとか、地球を守るとかは関係なく、ある私的な事で戦いたいと包み隠さず言う、もちろんシエラへの思いも聞かれたら答えよう、シエラがどう思うかはべつにして。

で、その上でシエラの事を聞く、そんな私と一緒にいてくれるかを。すぐに答えが出なくてもいい、シエラのことなら私はいくらでも待つ、なにせ時間はまだあるみたいだし。

ちよつとした決意（後書き）

まだまだ時間はあるし、ゆっくりこれからを考えよう。

無理だったら、それはそれで別の話の展開を考えればいいし。

と言うわけで、これからもダラダラやるかとは思いますが、ゆっくり楽しんでいただければさいわいです。

応えた思い

思い立ったら即実行！

などと言う勇氣は持ち合わせてはならず。

昼食時など顔を合わせたりはしたけれど、話せずじまいで、夜になつた。

そこで少し考える。

話しかける前に考える。

自分はMSに乗ってまで戦うか？

覚悟はある、実際戦った。

それを一生の仕事にするかどうかを聞かれたら困るけど、今は生きるためなら乗れる自信はある。

「よし、私は戦う・・・それを決めた」

「どうしたの？」

部屋の隅でテレビを見ていたシエラが近づいてきた。

「シエラ、あのね・・・」

緊張が出た、体の芯が急激に震えるほど冷たくなった気がした。

言うだけ、自分のことを言って、シエラのことを聞くだけ。

「実はね、大尉たちから連邦軍の新兵器のテストパイロットになつてくれないかって言われた」

「すごいじゃないですかー！！」

声を大きくして言う、目が輝いているようにも見える。

「テストパイロットって言うのはそうなるかもってだけ、実際にそうなるかはまだまだ未定で、予定もほとんど白紙みたいなんだけだね」

誤解を生まないように一応言っておく。

「それで・・・本題なんだけどね」

どんな答えが出るか分からなくて緊張した。

命は惜しい、誰だってそうだ、今までそれを見てきた。

だから、私よりも幼いシエラが臆しても仕方が無い。

そう思つて、自分へのダメージを減らす防御手段を構築した上で話した。

「大尉は、シエラを連れて行く気は無いつて、でも、シエラが自分で行くつて言つたら行かせる予定を立てることは出来る、みたいなことを言つてた」

話を簡略化して分かりやすいように言つてみたつもりだ。

「行きます、シアさんについていきます！」

すぐにくらいついた、ここまでは予想できた、その上で突き放すことを言つてみる。

「新兵器つて言うのはMSになる予定みたい、もしかしたらシエラもテストパイロットに選ばれるかもしれない、そうなったらMSに乗つてジオンと戦うかもしれない、死ぬかもしれない戦場に私と一緒にに放り出されて、もしかしたら昔の仲間と戦わされて、拳句に死ぬかもしれない」

「シエラさんは覚悟はあるんですか？」

「・・・私はあるつもり、戦えるつもり」

「なら私もあると思います、戦う覚悟、戦場に出たら尻込みしてしまつかもしれません、でも、今は戦えると思います」

ある意味予想どおり、でもその答えになるとは何故か思つていなかった。

「どうしてそういえるの？」

「シエラさんと一緒なら、それにジオンには知り合ひはいませんが、本国の訓練教官に少しMSの乗り方を教えられた程度です、だからこういうのは変かもしれませんが、気兼ねなく戦えます」

少しの間、シエラの自信溢れる顔から目が放せなかった。

「それよりも、ちょっと大尉のところに行つてきます！」

応えた思い（後書き）

なんとか続きが書けました。

シエラちゃん元気だねえ、などと筆者は思っています。

ここで一区切りはつけた思いなので、次はまた少し時間を進めてみようかなどと思ったりしています。

相変わらず、筆の遅い話の二転三転する私ですが、これからもよろしくお願いします。

無傷の体（前書き）

あけましておめでとございます。

少し遅れましたが何とか形に出来ました。
今回もゆっくり読んでいってください。

無傷の体

「お嬢さん」

この呼び方には少しとげがあるという事に今更気が付きだしたこのごろである。

どうもあの大尉への関係がそれらしい。

私としては弁解したい所だ、何もないと。

でも、慌てて言いふらした所でとげが増えるだけなので今のところは諦めておく。

「…はい」

しかしここは戦場だ、敵機の発見だったらどうする、仕方無しに返事をする。

「あの大尉と何かしたのかい？かなり親密な関係だって噂になっているぞ？」

珍しく優しい言い方だった。

「どうでしょう、話してるだけですが？」

適用に返す、面倒だった。

「へへっ、何でもねえよ」

「集中してください、このあたりも稀に敵が来るんでしょう？」

「基地でも地位のあるあの大尉のお氣に入りが回される所さ、死なない所なんだろう？ここはさ」

「どこから来るかなんて、分かったものじゃないでしょ？」

どこから敵が来るかなんて私に分かったものか。

一言継ぎ足したかったがここは堪えておく。

戦車の中は暑い。

男の声が余計にそれを感じさせてくれるようだ。

今の私の心境ではジオンとも戦えないだろう、むしろジオン軍に失礼だ。

すこし昔に、私をかばって死んでしまった人たちはこんな軽薄では

なかった。

親類もいない私を不憫に思ってたか皆が話してくれた、戦闘経験の少ない私のフォローをしてくれた、死を怖がった私の代わりにみんなが死んでしまった。

名前の入ったタグは全部は集められなかった、しかも自分の手で拾ったものはあまり無い。

目の前で死んでしまった二回目の隊長さんの物と親密にしてくれて戦闘支援車両の乗組員だった女性のものだけだった。

あとは全部、戦闘の後に他の人間が見つけたものだった。

しかも数個足りていない。

数が少ないしかさばる物ではないのでいつも身に着けている

この中でどう死んでしまったのだろう、苦しいのか、痛いのか、怖いのか。

狭い戦車の中で、私はいつも死を見ている、そのわりに死の手からは逃れられているけど。

その場合は必ず誰かを犠牲にしている。

死を見なくなったらその時はきっと死んでいるのだろう。

「お、おい!!」

男の声で我に返る、ここは戦場だ、敵か!?

そのとたんいきなり戦車が動き出す、音をたてて。

青い空と共に私は見た、あの青いMSを・・・

「近くに味方は!」

「ありません、基地に連絡してます」

無線は動かない、これはきっとミノフスキー粒子とかってものの影響?

確認する術は無い。

「近くに味方っていましたっけ!？」

「いないよ!くそっ、こんな所で死んじゃうのか」

男の声が厳しい、また戦車で死を見る羽目になろうとは、死神も笑っていることだろう。

「打って出ます！衝撃に注意！」

MSはすでに気が付いている、撃った所でかわされるのは分かりきっているが、撃たずにはいられない。

死を逃れるために。

二連装砲が轟音と共に跳ねる。

次弾装填と共に敵機の確認。

かすり傷すらない。

「おい、自分のタグはすぐ取れるとこに付けてろ」

男の声が小さい、覚悟をしているのだろうか。

言われるままに首に付ける。

コレが私の証・・・

余韻に浸ることも出来ない・・・

若干の起伏しかないこのあたりは私たちのほうが圧倒的に不利。

ひとまずは逃げ回るしかない。

不思議なことにあのMSは十分こっちに隙があったのに手のマシン

ガンでは攻撃してこなかった。

弾を渋っているのか他の味方に感ずかれたくないのか。

とにかく近寄せさえしなければなんとかなると思い始めた。

「次！」

轟音が再び来る、当たらない。

「跳ねるぞ！」

結構な振動だった。

「今どっちに向かってるんですか!？」

「基地に決まってる！」

「無理ですよ！あれはもう・・・」

「死にたくなかったら動くしかねえんだよ！」

空中での移動もあのMSは出来るらしい、しかも航空機ほどではないが十分戦車を追い抜くほど速い。

アドバンテージの数キロをもうそこまで近付いてきてて。

まっすぐこっちに向かってきている、砲弾を避ける時にだけ左右にズレて失速するが・・・

二連装砲をうまく使ってみせる。

「撃ちます！」

まず初弾、右の砲身だけ撃っておく、右に逃げる。

続いて左が追いかけて撃つ。

当たる、右足だ。

「嘘でしょ！」

「まじかよ・・・」

それを確認した私と男は啞然とした、こんな簡単に当たるはずないと。

私は余計に思った、MSに慣れていないとは言え私の攻撃をやすやす避けきったやつがこうもあっさり攻撃が当たったことを。

バランスを崩したのか、低く飛んでいたそれは、足をもつれさせた子供のように転んでしまった。

「どうもツイてるよ」

轟音を散らし私たちだけを付いてきたあのMSはその戦闘音を聞いて近づく別の戦車に目も行かなかったようだ。

味方が撃つたことを示すように、砲身から少しの煙が見える。

自身のレーダーをも壊してしまった例の粒子の罠と、私たちだけを捉えていたことによる油断か・・・？

なんにせよ生きている事が救いだ。

「味方、いないんじゃないかなかったですか？」

「あいつらに聞けよ、俺はしらねえ」

嫌な汗の感じが今も残る、しかし、倒れたMSを前にすると生きている実感に変わってしまう。

「よかった」

ぽつりと言ってみる。

目を閉じて、疲れを感じる。

「おい動いてるぞ？」

我に返るを余儀なくされた。

マシンガンが文字どおり火を吹いたのを見た。

激しい振動がそれに続く。

ダメだ・・・

死んだ。

おびただしい数の弾丸が向かってきて、安定した状態で地を走っているはずの戦車が飛ぶ。

最後にドンと音がして、目から火花が現れた。

痛くてたまらない、よく舌を噛まなかったものだ。

死にたくない、「こわい」。

「誰か」

「男の声はしない」

恐怖が取り巻いてる。

「何とかしないと、死にたく無い」

「MSは敵を見てる」

マシンガンを戦車に向けたまま微動だにしない。

しかし、戦車が動いたとたん・・・

戦車が蜂の巣にされた・・・戦車は撃たれて火を吹いているようにも見える。

散乱した戦車のなか、重たすぎる砲弾を手動で詰め込む、まだ、砲塔は生きている。

「あたれ、あたれ、あたれ」

声に出す、祈る、撃て撃て撃て。

ボロボロの戦車が最後に一度だけ、今まで感じた以上に跳ねだした。「腹横に命中、機体動かない」

生きてる。

「生きてる！」

下を覗く。

動かない男、首にかけているタグを拾う。

それでも男は動かない、タギ・ナガオ。
タギ軍曹は動かない。

頭からは血が出てない。

どこからも血が出てない。

「死んでるんだよね」

命の源である血なんかが出なくても人は死んだ。
そこまで考えて、あのMSは音をたてて転んだ。

あの中の人間を見てみたい。

痛みは不思議とない。

歩けた。

走れた、折れてないらしい。

倒れたMSのハッチを開く。

開け方はあの機体と変わらなかった。

苦労して登り、こじ開けた。

少女だった、MSパイロットの制服なのだろうか、変わった分厚い服を着てて。

銃を握り締めている、私も撃ったことある、オートマチックの銃、
実弾を撃つ銃だった。

私が撃たれると身構えたが、撃つことは無かった。

自分の胸に銃口を押し当てている、自分で死ぬつもりか、だが。

指が無残に折れている、いや、指はぐちゃぐちゃになっているように見えた。

「お前は殺した連邦の人間の・・・」

その先は出ない、罪を償えとか言いたかった。

殺そうという発想は最初から無かった。

銃を丁寧にはらしてからコックピットから投げ捨てる。

「死にたい！私はもうギレン様に！」

「死ぬな、私は死にたくても死ねなかった」

「いやあ！離して！」

「ジオンは死にたい人が死にたくない人を殺すの？」

私は、暴れる少女を押さえ込もうとして、気が遠くなるのを感じた。
だんだん集中できなくなってくる。

少女の上に倒れこんだ、でもこんな狭い場所なら私をどかさない限り出れないし、その手で私を同行は出来ないだろう。

味方が、来るまで、後悔してなさい・・・

無傷の体（後書き）

サブタイトルは、血を流すことなく無傷の体で死んだ戦友と、血を流さず無傷で生きている自分を指してます。

分かりにくいかなーとか思ったので補足。

いつもどおり強引な切り口で話し進めてます。

今回も時間ちよっと進めました、本文には書いてませんけど。

なんとか続けていきたいと思いつつも、なかなか筆が進まない私ですが、頑張っていきたいと思っています。

今年もよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6635s/>

機動戦士ガンダム 少女の始まり

2012年1月10日21時50分発行